

1月7日 ヨハネによる福音書1章29～34節

説教題：「洗礼を受けるということ」

一般的に「悔い改める」「罪を告白して懺悔する」という言葉は犯罪を行ったような印象を受けてしまいますが、キリスト教の中では「自分の思う正しさではなく、神様の正しさに従う」ことを、悔い改めと呼んでいます。今日の聖書個所で、イエス様に洗礼を行った洗礼者ヨハネが人々に勧めていたのが、その悔い改めなのです。ここでヨハネは、イエス様のことを「世の罪を取り除く神の小羊だ」と言っています。「取り除く」と訳されている言葉は「取り除く・終わらせる」という聖書に示されている意味以外にも、「背負う・担う」という意味を持っています。十字架による贖いによって、自分のものではない世の罪を背負い、それを神の小羊として贖うことで、世の罪をこの世から終わらせることが示されています。

ここでヨハネが行っていたように、洗礼を受けるということは、イエス様が自分を導く主であると信じることであり、イエス様の言葉が正しいと信じることで大きな前提になっています。私たちは、イエス様が神の子であるという事、イエス様が父なる神と同じく、子なる神であるキリストだという事、そしてその神様であるイエス様が、私たちを救うために十字架という処刑までの道を歩んだことを信じています。イエス様が、自分の命を大切にすると理性の正しさに従うのではなく、神様の御心を叶える「神様の正しさ」のために命を捨ててまで、私たちに愛を示してくれたということを私たちは信じる事が出来ました。今まで信じていた様々な事ではなく、イエス様が語る神様の言葉を信じたからこそ、私たちは洗礼を受けるに至ったのです。この洗礼は、私たち人間に必要な不可欠な、罪を洗い清める業でありながら、今日の個所ではイエス様もまた同じように洗礼を受けています。本来そのような必要はないはずなのに、悔い改める必要などない程に正しい方であるイエス様が、私たちと同じように洗礼を受けました。それは、死ぬ必要がない身でありながら私たちのために死んだ、その十字架を指し示す業でありました。水によって、霊によって、命を失ってまた新しい命を得る。洗礼とはイエス様が示した十字架と復活の業を示すものでもありました。

このような悔い改めを経て、私たちは信仰の道に入りました。罪から解き放たれて、もう罪を犯す必要がなくなり、私たちは自分の正しさではなく、神様の正しさを追い求めることがゆるされているのです。私たちの魂は、神様に強められて、出来事や感情に支配されるような弱いものではなく、神様の正しさを追い求めることが出来る強い魂へと変えられています。理性によって自分をコントロールし、神様の御国をこの世に実現するための力強さを与えられているのです。その力を上手に使うことができるのか、それとも感情に支配されて感情の操り人形になり、また罪の中へと戻ってしまうのか、私たちは常にそのことを考えながら生き続ける必要があるのです。自分の意見を相手に「伝える」ために上手に感情を扱いながら、「私が正しい」という思い込みにとらわれてしまうことがないように気を付けながら、そして「神様こそが正しい」という信仰の姿勢に立ち返ることが出来るように、いつも神様の御心に尋ねるようにしたいものです。

本日は、公現日、イエス様が人々の前に現れて、ガリラヤでの伝道が始まった日を記念する礼拝でもあります。洗礼者ヨハネによる洗礼を受けて、悔い改める必要があるわけではないけれど、それでも私たちの前を歩む方としてその道を示してくれたイエス様の、公の歩みの第一歩目が今日示されました。私たちもまた、この新年最初の主日から、この一年間の最初の一步を共に歩みだしましょう。

今日の説教箇所：ヨハネによる福音書1章29～34節

- ・29:その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。わたしはこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れるために、わたしは、水で洗礼を受けに来た。」そしてヨハネは証しした。「わたしは、“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を受けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を受ける人である』とわたしに言われた。わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。」